

沿岸域集落の空間構成に関する研究(その1)

— 紀伊長島沿岸域集落の空間構成 —

日大生産工(院) ○縣 真之介 日大生産工 宮崎 隆昌

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

我が国における多くの沿海集落^{注1)}は、磯・浜近傍の非常に限られた環境下に存在し、長い年月をかけて逐次継続的に集落構成や住居形式を変化させて持続してきた自然発生的集落である。

各沿海集落における一般的に共通の性質としては、居住する住民の大部分が様々な型で営んでいる水産業(漁業)を主たる生業としてきた点、また沿海集落が漁港・漁協・店舗・住居を密集させ、生産と生活の場を一体化させた高密度住空間である点が挙げられる。

沿海集落は各々その立地する環境によって、個別的に現実的に対応して形成されている。漁業集落の居住環境は、安全性や利便性を住居の単位では充足できず、集住単位のまとまりで対応し、居住環境はその土地の造成・形成の際の規模や構成の原理が後まで影響している。また、良好な漁場に面して構成された沿海集落の漁家住居の敷地条件は厳しく、建て替えや増改築の場合にでも以前の形態を踏襲しなければ、矛盾が生じて住まいにくくなってしまう。更に、生業の変化がそのまま住居形態の変化や生活様式の変化にむすびつかない。漁業集落で居住するには伝統的な慣行に準拠しなければ生活の安全性や利便性が維持できないと言える。

本研究は、そのような自然発生的に形成された高密度住空間である沿海集落の空間構成を実証的に調査し、立地特性の異なる沿海集落を比較及び分析することによって、各沿海集落同士に見られる共通性または特殊性を把握し、集落自体の内部構造^{注2)}を明らかにすることを目的とし、今後の漁村の環境形成に関する計画に、寄与することを意図している。

1.2 既往研究と本研究の位置づけ

自然発生的集落である沿海集落を離島集落および沿岸域集落に分けて集落の空間構成を比較し、その特性を把握した研究として山本らの研究¹⁾が挙げられる。山本らの研究では、距離感覚^{注3)}という概念を軸に、漁業生産の占める割合と居住者の常態位置^{注4)}との関係、漁協からの距離と屋外空間における行為の関係、住居間距離^{注5)}と緩衝空間^{注6)}の配置の関係を立地特性の異なる集落同士で比較・分析している。

山本らの研究における対象地は、三重県の答志島(答志・和具・桃取)と菅島の4つの離島集落、および三重県度会郡の阿曾浦と相賀浦の2つの沿岸域集落であり、それら6つの沿海集落は、純漁村、半農半漁村を中心とした比較的類似した集落^{注7)}である。

本報は、市街地漁港漁村である三重県紀伊長島沿岸域集落の特性を既往研究によって調査されたこれら6つの沿海集落と比較することによって把握していく。

1.3 住居の空間構成の比較・分析方法

本報は、紀伊長島沿岸域集落の住居の空間構成を他集落との比較によって論じていく。

本報における、住居の空間構成の比較・分析方法を以下に示す。

- ① 各集落における住居の間口の平均値、奥行き¹⁾の平均値を把握し、比較する。
- ② 各集落における近隣住居との距離を把握し、比較する。
- ③ 各集落における住居の間取りを分類し、それらの割合や間取りの種類²⁾の数を把握し他集落とで比較する。

以上の分析をまとめて、紀伊長島沿岸域集落の空間構成の特性を把握する。

2 研究対象集落の概要

本報は紀伊長島沿岸域集落を研究対象集落とし、その空間構成を把握し記述するために、既往研究において研究対象集落となった三重県鳥羽市答志島(答志・和具・桃取)・菅島の離島集落と、比較的類似した環境であるが沿岸域に立地する三重県度会郡南島町阿曾浦・南勢町相賀浦の沿岸域集落の6集落を比較対象集落として選定している(図1)。以下に、研究対象集落の概要を示す(表1)。

研究対象集落である紀伊長島町は、三重県南部の東紀州地域に位置し、屈曲に富んだリアス式海岸と背後に位置する大台山系との間に漁港・漁協・店舗・住居を密集させている。集落の骨格を形成している道は、近隣都市や近隣集落に繋がる道路を主道とし、そこから路地が派生していく房状の構成をなしている(図2)。紀伊長島町は港からトラックや鉄道で、大阪・東京方面の消費地へ魚を送る主要な供給地であり、集落内の全世帯数、人口、漁獲量、陸揚量とも他集落に比べて多く、他の地域から陸上交通によって繋がるのが容易な開放系の市街地漁村である。

3 調査の概要

研究対象集落のフィールドサーベイは2005年7月8月の計2回行った。また、既往研究の研究対象集落においては2000年7月から

2005年7月にかけて計9回、行っている。

フィールドサーベイでは各世帯を訪問し、住居平面図を採取するとともに生活者に部屋の使われ方や常態位置の場所、生活のサイクル、漁業形態等についてインタビューを行った。また、集落内の路地等の住居外部空間においても実測を行った。

4 間口奥行きの平均値による比較

図3は、各集落における住居の間口および奥行きの平均値を表している。図3より、紀伊長島の間口は、5m強の幅で7集落中最も狭く、紀伊長島における奥行きは、約12mの長さで7集落中最も長いことがわかる。

次に、間口および奥行きのそれぞれの平均によって導き出された住居形態について見てみると、図3より、紀伊長島の間口が狭く奥行きの長い長屋形式の住居形態は、他の集落に比べて特殊であることがわかる。紀伊長島と同じ沿岸域集落に属する阿曾浦・相賀浦を見てみても、紀伊長島のような長屋形式の住居形態にはなっておらず、阿曾浦・相賀浦の住居形態は、答志・和具・桃取・菅島の離島集落の住居形態に相似している。

表2は、各集落の間口および奥行きの標準偏差を表している。表2より、紀伊長島の間口および奥行きの標準偏差はどちらも他の集落に比べて最も高い。ゆえに、他の集落に比べ



図1 各集落の位置

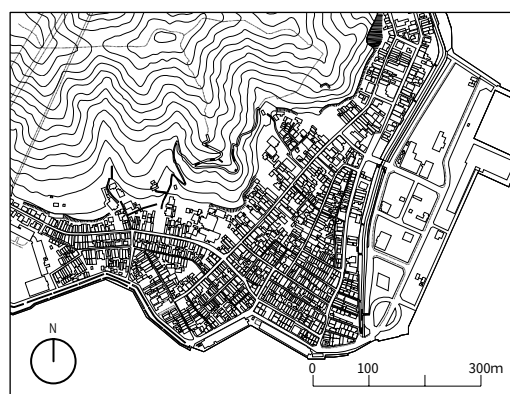


図2 研究対象集落

表1 各集落の概要

	答志	和具	桃取	菅島	阿曾浦	相賀浦	紀伊長島
集落内の全世帯数	356世帯	153世帯	261世帯	215世帯	500世帯	325世帯	4,341世帯
調査世帯数	70世帯	42世帯	51世帯	47世帯	54世帯	34世帯	47世帯
有効世帯数	68世帯	41世帯	46世帯	39世帯	53世帯	32世帯	41世帯
全世帯数に対する有効世帯数の割合	19.1%	26.8%	17.6%	18.1%	10.6%	9.2%	0.01%
人口	1,500人	601人	995人	848人	1,314人	937人	11,045人
漁業形態	純漁村	主漁従農村	半農半漁村	純漁村	純漁村	半農半漁村	市街地漁港漁村
属人漁獲量	4,725t	1,261t	2,772t	1,514t	1,057t	689t	6,685 t
属地陸揚量	3,823t	1,690t	2,772t	1,597t	1,028t	214t	6,685 t
漁港種別	第2種	第1種	第2種	第2種	第2種	第2種	第1種

※平成12年国勢調査、平成14年港勢調査

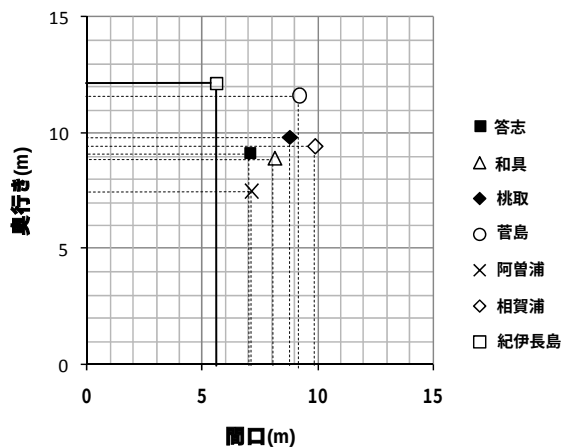


図3 各集落の間口および奥行きの平均

ると紀伊長島の各住居の住居形態にはばらつきが生じていると言える。ここで紀伊長島と同じ沿岸域集落に属する阿曾浦・相賀浦について他の集落と比較してみても、紀伊長島のように顕著に高い標準偏差ではなく、阿曾浦の標準偏差に関しては間口・奥行きとも最も低い。

ゆえに、紀伊長島の間口・奥行きは、間口が狭く奥行きの長い、特殊な長屋形式の住居形態であり、かつ各住居の間口・奥行きのばらつき度が最も高いという2つの特殊性を持っていると言える。

5 近隣住居との距離による比較

図4は、各集落の住居間距離の平均を表している。本研究では、住居間距離を道路側住居間距離および隣家側住居間距離の2種類に分類し、距離の平均値を把握した。道路側住居間距離と隣家側住居間距離の区別は、ゼンリン住宅地図を基に道路の位置を把握し、道路を挟む住居間距離を道路側住居間距離、道路を挟まない住居間距離を隣家側住居間距離とした。

図4より、紀伊長島の住居間距離は他の集落に比べて道路側が最も長く、隣家側が最も短いことがわかる。同じ沿岸域集落に属する阿曾浦・相賀浦と比べても道路側住居間距離の長さ、隣家側住居間距離の短さは特殊であることがわかる。

ここで、集落内の全世帯数、人口、漁獲量、陸揚量とも他集落に比べて多く、他の地域から陸上交通によって繋がることが容易な開放系の市街地漁村という紀伊長島の集落特性を考慮すると、他集落に比べて顕著に長い道路

表2 各集落の間口および奥行きの標準偏差

	答志	和具	桃取	菅島	阿曾浦	相賀浦	紀伊長島
間口 (mm)	1820	2381	2288	1925	1779	2039	2519
奥行き (mm)	1812	1950	2394	2630	1424	1474	3220

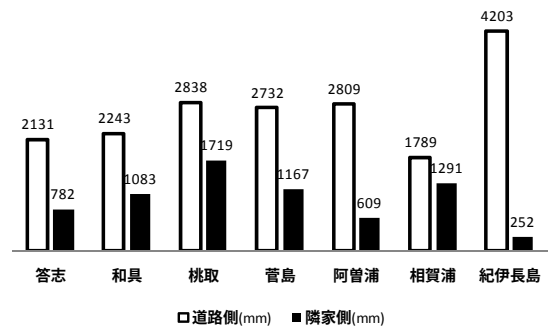


図4 各集落の住居間距離の平均

側住居間距離は、市街地漁港漁村という他地域との交流の盛んな内部構造を考慮した上での道路の拡幅による交通機能の向上が要因となっていると考えられる。

また、他集落に比べて顕著に短い隣家側住居間距離は、限られた領域内に漁港・漁協・店舗・住居を密集させ、生産と生活の場を一体化させた高密度集住空間である沿海集落において、極端に多い人口を有している市街地漁港漁村の内部構造による、住居環境の著しい高密度化が要因となっていると考えられる。

6 間取りの分類による比較

図5は、住居の間取りの類型化を表している。また、表3は、その類型化によって分類された各集落の1階部分における間取りの型の割合と種類数を表している。

表3より、紀伊長島の1階部分において、縦列型の間取りが最も多く存在していることがわかる。ここで、表3より、縦列型は相賀浦を除く集落において最も多い間取りの型であることから、紀伊長島における間取りの型には、共通性が生じていると言える。

次に住居の間取りの種類数について見てみると、表6より、紀伊長島における間取りの種類数は、他の集落に比べて最も少ないことがわかる。同じ沿岸域集落に属する阿曾浦・相賀浦と比較してもその種類数は最も少ない。これにより、紀伊長島の住居の1階部分は他の集落に比べて、間取りの型を統一している傾向が最も強く、特殊性が生じていると言える。表3より、紀伊長島の縦列型の割合が他の集落に比べて最も多いのもその傾向を表していると考えられる。

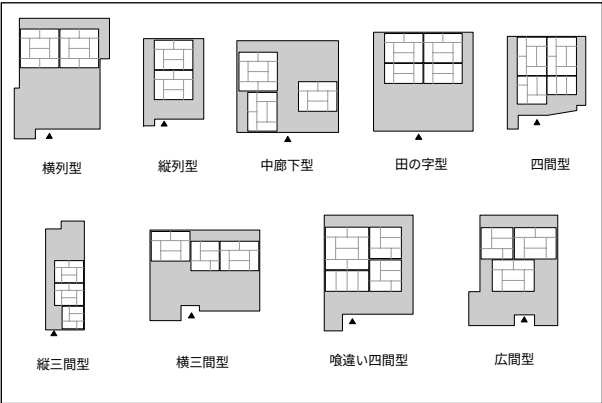


図5 住居間取りの類型化

表3 各集落の間取りの類型化の割合と種類数

	横列型	縦列型	縦三間型	横三間型	田の字型	四つ間型	喰い違い四つ間型	広間型	中廊下型	その他	種類数
答志	1.6%	55.6%	7.9%		6.3%		9.5%				5
和具	16.1%	32.3%	12.9%	6.5%	3.2%		3.2%	22.6%		3.2%	7
桃取	12.2%	53.1%		6.1%	26.5%					2.0%	5
菅島	23.8%	23.8%	11.9%	19.0%	14.3%		7.1%				6
相賀浦		6.5%	6.5%			6.5%	9.7%	16.1%	54.8%		6
阿曾浦	7.7%	53.8%	1.9%			1.9%	3.8%	15.4%	13.5%	1.9%	8
紀伊長島	13.3%	64.4%	22.2%								3

ゆえに、紀伊長島における間取りは、間取りの型に沿海集落同士の共通性が見られるものの、他の集落に比べて型の多様性は乏しく、各住居の間取りの型がより平等的に統一されているという特殊性が生じていると言える。

7 まとめ

本報は、紀伊長島沿岸域集落における住居の空間構成を他の三重県の集落と比較し、把握を試みた。

以下に各分析の結果をまとめる。

I：紀伊長島における間口・奥行きは、他の集落には見られない特殊な間口が狭く奥行きの長い長屋形式であり、かつ各住居の間口および奥行きの偏差は、他の集落に比べて最も大きく、各住居の間口および奥行きには、ばらつきがあり、特殊性が生じている。

II：紀伊長島における住居間距離は、他の集落に比べて、道路側住居間距離が最も長く、隣家側住居間距離が最も短い。これらは他地域との交流が盛んであり、かつ世帯数・人口とも多い市街地漁港漁村の集落特性によるものと考えられる。

III：紀伊長島における1階部分の間取りは、縦列型である傾向が強く、これは他集落と比べて共通性が見られる結果である。一方で、間取りの種類は他集落に比べて多様性が見られず、特殊性が生じている。

以上の結果から、紀伊長島沿岸域集落における住居の空間構成は、住居1階部分の間取りの型の割合に沿海集落の共通性が見られたも

の、間口・奥行き、住居間距離、間取りの型の統一性には特殊性が生じていると言え、これらの特殊性は沿岸域集落においても顕著である。住居間距離に関しては、紀伊長島沿岸域集落が他の集落に比べて、集落内の全世帯数・人口を多く所有しており、かつ他の地域から陸上交通によって繋がることが容易な開放系の市街地漁村であることが関係していると考えられるが、間口が狭く、奥行きの長い長屋形式の住居および間取りの型の統一性に関しては、いかなる内部構造をもって存在しているか定かではない。ゆえに、今後はそれらの内部構造を把握すべく、部屋の配置特性や住み手の居場所について他の集落との比較を進めていきたい。

「注釈」

- 1) 斎藤兵市氏によれば、「漁村は地域的(形式的)には離島漁村、沿岸漁村に分けられ、部落別(実質的)には地先部落と市街地部落とに分けられる・・・即ち前者は地理学的分類であり、後者は社会学的分類である」としている。
- 本研究ではその分類を参考に区分し、離島集落(答志・和具・桃取・菅島)・半島集落・沿岸域集落(阿曾浦・相賀浦・紀伊長島)を総称して沿海集落としている。
- 2) 本研究における内部構造とは、形態(集落空間)が生じる際に直接的に要因となっている構造を意味している。
- 3) 個人が持つ集団との距離感覚。住居内部空間において個々の生活者の常態位置²⁾間の距離を評価することによって検証している。
- 4) 住居内部空間での日常生活において、利用する頻度が高く、使用・滞在時間が長い個人の特定的位置。
- 5) 隣接する住居との外壁間の両端部における平均距離。
- 6) 隣家および周辺環境との緩衝空間となり得る装置。既往研究では、内壁と一体化して固定されている「押し入れ」および「仏壇」としている。
- 7) 織田武雄氏による集落の分類では、村落の農業依存度・職業別人口構成・農業生産額と漁業生産額との比率等を考慮して、「I 純漁村、II 主漁従農村、III 半農半漁村、IV 主農従漁村、V 純農村、VI 漁業市場」に分類している。
- 本研究においてもその分類を参考にしながら、斎藤兵市氏による社会学的分類を考慮して、紀伊長島を市街地漁港漁村と分類した。

「参考文献」

- 1) 山本健司・宮崎隆昌、沿海集落における生活空間の構成上の特性と「距離感覚」に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.605、(2006)、pp.31～38。
- 2) 宮崎隆昌、圏一農村における計画地域論「漁村の生活単位」、建築雑誌、Vol.94、No.1154、(1979)、pp.37～38。
- 3) 山岡栄市、漁村社会学の研究、大明堂、(1965)。